

夕陽景観が成立する名所の地理的特性に関する研究

—『日本の夕陽百選』に着目して—

A Study on the Geographical Characteristics of Famous Sunset Spots

-Focusing on "Japan's Best 100 Sunsets"-

○石井大河¹, 岡田智秀², 栗本賢一²

*Taiga Ishii¹, Tomohide Okada², Kenichi Kurimoto²

Abstract : The purpose of this paper is to quantitatively clarify the geographical characteristics of renowned sunset viewpoints by analyzing the "Japan's Best 100 Sunsets" list. As a result, this paper clarified a significant spatial bias towards southwestern Japan and a strong positive correlation between elevation and distance from the coastline, which is moderated by regional topography.

1. 研究目的 ; 夕陽景観は、太陽が水平線に近づくことで空や風景を劇的に染め上げる現象であり、古来より文学や絵画の主題として扱われる等、人々の感性や文化に深く根ざした景観資源である。

夕陽景観に関連する既往研究では、夕陽の色彩や光のメカニズムの解明¹⁾、夕陽がもたらす心理的效果や心象風景としての分析^{2),3)}、時間経過に伴う印象変化の定量化^{4),5)}など多岐にわたる。また、夕陽を地域資源として活用したまちづくりの事例報告も存在する^{6),7)}。しかし、これまでの研究は夕陽の印象や活用方法を扱うものであり、美しい夕陽を望む視点場自体の地理的特性を定量的に分析した研究は蓄積に乏しい。そこで本研究では、『日本の夕陽百選』(以下;『百選』)(表1)に選定された全182箇所を分析対象とし、GISを用いた空間分析および統計分析を通じて、夕陽の名所(視点場)の地理的特性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法 ; 本研究では、『百選』で選定された全182箇所の名所を分析対象とし、表1に示す資料より、各名所の位置情報(緯度・経度)、および基盤地図情報から各名所の標高と最も近い海岸線からの距離を取得した。これらのデータを用いて、GIS上で名所の全国的分布傾向、集中地域の抽出、および視点場の地理的条件(海岸線距離(d)・標高(h))の相関分析を行った。

3. 『日本の夕陽百選』の概要 ; 『百選』は、「NPO 法人日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会」が取りまとめている¹³⁾。これは、夕陽の持つ文化的価値を再評価し、それを活用した地域振興を図ることを目的に始められた事業である。選定は、紀行作家や写真家ら専門家が構成される民間の選考委員会が行う。選考過程では、全国の地方自治体等からの推薦に基づき、最終的に「住民ぐるみで、意欲をもって取り組んでいる地域」という基準を重視して選定される点の特徴である。本協会による選定は現在も継続しており、本稿執筆時点で182箇所が選定されている。

4. 結果および考察

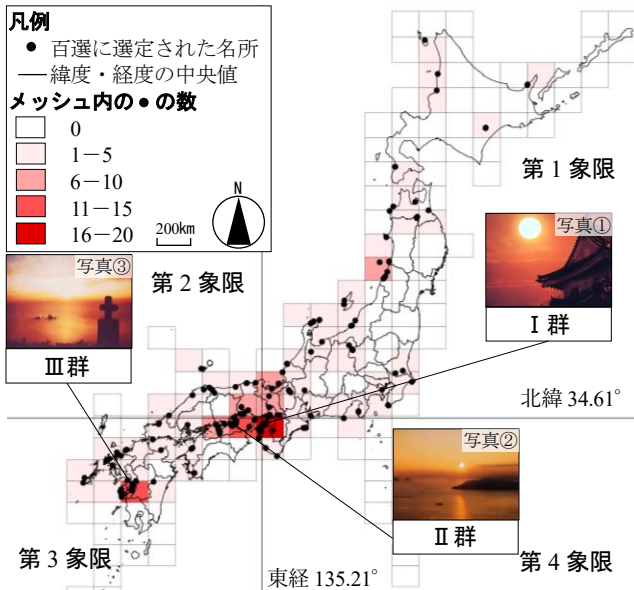
(1) 名所の地理的偏在とその要因 ; 『百選』に選定された182箇所の夕陽の名所を全国地図上にプロットし、その緯度・経度の中央値(北緯34.61°、東経135.21°)を基準に国土を4象限に分割した(図1)。その結果、名所が多く分布するのは第1象限(北東)と第3象限(南西)に各70箇所(全体の38.5%)の分布がみられた(表2)。しかし、各象限の陸地面積を考慮すると、第3象限の面積は第1象限の約29%に過ぎず、名所の分布密度は 9.2×10^{-4} 所/km²と第1象限に比べて大きいことから、日本の南西部に著しく偏在していることがわかった。この要因として、夕陽が西に沈むという基本的な条件に加え、日本の国土が北東から南西方向に伸びる弓状列島であるという地理的形状に起因すると考えられる。西側に開けた海岸線が多い南西日本では、夕陽景観の眺望機会そのものが多いと示唆される。

(2) 視点場の立地法則性 : 海岸線距離と標高の相関 ; 全182箇所の視点場における海岸線距離(d)と標高(h)の関係を分析した結果、両者の間には統計的に有意な強い正の相関が認められた(スピアマン順位相関係数 $\rho=0.661$, $p<.001$)(表3)。この強い相関は、海沿いで

表1 分析対象資料

項目		調査概要
調査期間		2025年8月1日(金)~9月30日(火)
対象資料	パンフレット 雑誌	・NPO 法人日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会が発行した夕陽景観名所のパンフレット ①夕陽パンフレット 2000 ⁸⁾ ②夕陽と朝日のパンフレット 2001 ⁹⁾ ③日本列島夕陽と朝日の旅 2003 パンフレット ¹⁰⁾ ④日本列島夕陽と朝日の旅 2004 パンフレット ¹¹⁾ ・モトツーリング 2020年3月号 Vol.45 ¹²⁾
	ウェブサイト	・朝日・夕陽の放送局 HP (NPO 法人日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会公式 HP) ¹³⁾

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち



写真① 岸和田城の夕陽 [参考文献¹³⁾より引用], 写真② 屋島の夕陽 [参考文献¹³⁾より引用], 写真③ 西平橋公園の夕陽 [参考文献¹³⁾より引用]

図1 『日本の夕陽百選』の分布 [筆者作成]

表2 各象限のデータ [筆者作成]

項目	第1象限	第2象限	第3象限	第4象限
名所の数	70	21	70	21
陸地面積	261,503km ²	27,889km ²	76,287km ²	12,171km ²
名所の分布密度	2.7×10 ⁻⁴ 所/km ²	7.5×10 ⁻⁴ 所/km ²	9.2×10 ⁻⁴ 所/km ²	1.7×10 ⁻³ 所/km ²

表3 各群のデータ [筆者作成]

項目	全体	I群	II群	III群
名所の数	182	20	12	12
平均海岸線距離 d (m)	4877.3	508.3	342.9	235.7
平均標高 h (m)	94.8	12.1	85.9	82.4
スピアマン順位相関係数 ρ	0.661	0.295	0.963	0.874
p 値	p<.001	p>.05	p<.001	p<.001

は低地から、内陸では高台から夕陽を望むという、視点場選定における基本的な法則の存在を示唆している。これは、内陸部では前方の障害物(山地, 建物等)を避けて西の空を見通すために、より高い視点場が必要になるためと解釈できる。

(3) 地形特性による立地法則の差異; この立地法則性の地域差を検証するため、一次メッシュ(約 80km 四方)を用いて名所の集中度を分析した(図1)。その結果、特に集中が著しい3つの地域(I群: 大阪府西部, II群: 瀬戸内海沿岸, III群: 熊本県西部)が抽出された(図1)。また、これら3群は、いずれも全国平均(4877.3m)より平均海岸線距離が近く、海に近い地域に集中する傾向が見られた(図1, 表3)。

これらの地域を比較すると、前述の立地法則が地域の地形特性によって強く規定されることが明らかになった。I群(大阪府西部)は、平均標高 12.1m という広大な沖積平野に位置しており、相関係数は $\rho = 0.295$ と他群に比べて低い値を示し、有意差も認められなかった(表3)。この結果は、低平な地形では視点場の標高の重要性が相対的に低いことを示唆している。対照

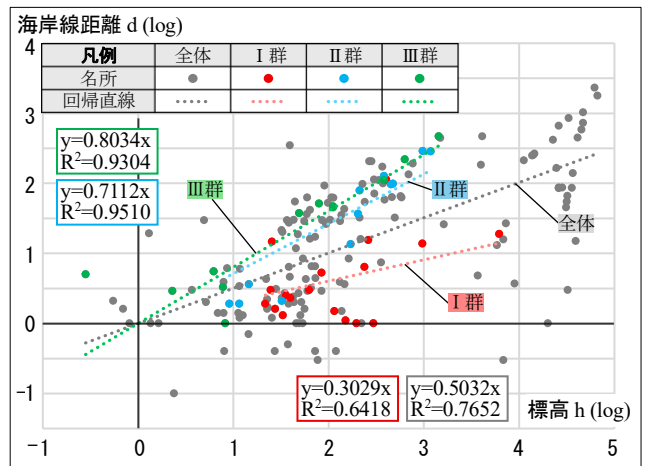


図2 名所散布図 [筆者作成]

的に、島々が多く起伏に富むII群(瀬戸内海)やIII群(熊本県西部)では、相関係数がそれぞれ $\rho = 0.963$, $\rho = 0.874$ と極めて高い値を示した(いずれも $p < .001$) (表3)。この相関の強度の違いは、群ごとに色分けしてプロットした散布図(図2)からも視覚的に確認でき、II群・III群のプロットがI群に比べてより明確な直線状の分布をなしている。この極めて強い相関は、これらの地域では「内陸=高台」の法則性がより顕著に現れることを示している。これらの地域では、島々や半島が織りなす複雑な地形が夕陽に染まることから、「夕風」のような自然現象も相まって、深紅に染まる鏡状の海面とそこに浮かぶ地形を一体的に捉えた俯瞰景が夕陽景観の主たる構成になっている。

5. まとめ; 本研究では『日本の夕陽百選』を分析し、夕陽の名所の地理的特性を定量的に解明した。その結果、名所は南西日本に偏在し、視点場は「海沿いでは低地、内陸では高台」という強い法則性により成立することが示された。さらに、この法則性は平野部よりも島嶼部でより顕著に現れるなど、地域の地形特性に規定されることも明らかにした。

参考文献

1) 幸坂麻琴他2名: 「トワイライト景観の定量化—西台北地域の地域振興を見据えて—」, 地理情報システム学会 GIS-理論と応用, Vol.30, No.2, pp.19-29, 2022/2) 古谷勝則: 「思い出に残る自然風景に関する研究」, 日本造園学会ランドスケープ研究, Vol.61, No.5, pp.669-674, 1997/3) 堀繁他2名: 「体験された風景の構造」, 日本造園学会造園雑誌, Vol.51, No.5, pp.287-292, 1987/4) 大影佳史: 「時系列連続写真の分節実験からみた夕刻の景観の印象変化に関する基礎的考察」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.76, No.659, pp.109-115, 2011/5) 大影佳史: 「時系列連続写真の分節実験からみた夕刻の景観の印象変化に関する基礎的考察 その2」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.79, No.702, pp.1777-1782, 2014/6) 柳沼宏寿: 「日本海夕日アートプロジェクトの実践 地域性を生かした造形活動として」, 日本美術教育学会美術教育, No.291, pp.94-101, 2008/7) 若松進一: 「地域づくりの軌跡 夕日をテーマにしたまちづくり」, 地方自治研究機構地域政策研究, No.45, pp.57-66, 2008/8) NPO法人日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会: 「夕陽パンフレット2000」, 2000/9) 前項8)の協会: 「夕陽と朝日のパンフレット2001」, 2001/10) 前項8)の協会: 「日本列島夕陽と朝日2003」パンフレット」, 2003/11) 前項8)の協会: 「日本列島夕陽と朝日の旅2004」パンフレット」 2004/12) 「モトツーリング2020年3月号」, 内外出版社, pp.38-45, 2020./13) 朝日・夕陽の放送局, <https://www.area-best.com/yuhi/index2.html> (最終閲覧日: 2025.9.30)